

# 児童と学生が協働して生み出す創作表現の可能性

—教材開発のための基礎研究(1)—

望月 たけ美, 土橋 淳\*

Basic research for developing teaching materials (1):  
Exploring the possibilities creative expression in collaborations between  
university students and elementary school first graders.

MOCHIZUKI Takemi, DOBASHI Atsushi\*

2023年11月2日受理

## 抄 録

児童と学生の「合奏劇」協働実践を計画し始めて実践した2021年度では、児童の「演奏に対する思い」から出る発言やアイデアを生かしたり引き出したりしながら、担当する楽器の良さをより一層引き出していく必要があると分かった。2022年度では、学生が活動の中で児童と十分に対話し、協働実践に余裕を持てるように練習や実践方法を見直し、学生が楽器理解をもとに範奏となる表現力を高め、Teamsに共有された実践録画映像を確認することで自身の表現や周囲の実践者を客観的に評価し、主体的に改善を繰り返していく過程を設けた。2022年度実践学生が、範奏や演技、創意工夫した指導を試みた結果児童にどう働きかけたのか、観劇後と協働実践後の2回実施した児童アンケートをもとに考察する。また第2の「合奏劇」教材開発の手がかりを得るための基礎調査を行う。

キーワード：協働実践，教育楽器，教員養成，範奏，教材開発

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景Ⅰ：「合奏劇」実践歴

「合奏劇」とは、登場人物が楽器であるという特徴を持った音楽劇である。北浦ら(2016)<sup>1</sup>の手作り楽器を用いた劇活動や、津田ら(2020)<sup>2</sup>の材質が生むイメージ音と子どもの表現を関連付けた活動など、多くの音作りへのアプローチが研究されている。しかし、楽器自体が登場人物となりストーリーを通して各楽器の特性に気づいて

\* 常葉大学教育学部附属橘小学校教諭

いく劇は類を見ない。研究代表者（望月）は、2019年に合奏劇「がんばれカスタネットくん！」<sup>3</sup>を、音や楽器との初めての出会いや楽器の特性に気付く教材として位置付け、筆者のアレンジによる台本を作成した（望月、山本 2020）<sup>4</sup>。研究代表者は、台本作成にあたり「合奏劇」を、「登場人物は楽器（音具）である」「各楽器の良さに気付いていくストーリー性を持つ」「各楽器の特性を伝えるアピール部分を持つ」劇として3つの定義づけを行っている。「合奏劇」は通常の音楽劇とは違い、どう演じ、どう表現し、どう伝えるかによる人的環境が核であり、大胆な舞台装置等は必要としない。どの楽器にも良さ（特性）があることに気付いていくストーリー性や、楽器自体になり切って演じる劇中のアピール部分によって、聴き手や演じ手が劇を通して個々の楽器の特性・材質・形状・奏法が音色の違いを生むことへの理解を深めることをねらいとしている。登場人物（楽器）は、タンブリン・トライアングル・鈴・カスタネット・ハンドベルで、乳幼児期から取り入れられる楽器であり、初等中等の音楽活動においても継続して用いられる教育楽器を主としている。

合奏劇「がんばれカスタネットくん！」は、聴き手は楽器への興味関心を持ち、演じ手が創意工夫して表現する劇として、多様な対象者によって上演される機会を得た。これまで筆者による計画実践において「合奏劇」を上演したのは、保育者養成大学の学生173名、新採用教諭研修プログラムでの幼稚園教諭32名、教員免許更新講習受講者11名、幼稚園連合会教員研修受講者20名、教育学部の学生32名、教育学部生と協働実践した1年生児童84名の総計352名である。演じ手は7歳～50歳代に至り、聴き手は0歳～50歳代と幅広い対象となっている【表1】。

【表1】2019年度～2022年度における「合奏劇」の実践歴

実践年度(月)	実践地域	実践場所	実践環境	実践者(人数)	観劇者(人数)	概要	授業実践者・研修講師
2019年	神奈川県	O短期大学	音楽室	O短大学生(135)		「音楽表現」授業内実践	研究代表者
2019年	神奈川県	A保育園	多目的ホール	O短大学生(7)	0～5歳児(80) 保育者(11)	「表現実践」「ゼミナール」授業学外実践	研究代表者、 O短大研究者
2019年	神奈川県	B保育園	2歳児教室	O短大学生(7)	2歳児(10) 保育者(6)	「表現実践」「ゼミナール」授業学外実践	研究代表者、 O短大研究者
2019年	神奈川県	C幼稚園	多目的ホール	O短大学生(12)	3歳児(43) 保育者(13)	「表現実践」「ゼミナール」授業学外実践	研究代表者、 O短大研究者
2019年	神奈川県	D保育園	多目的ホール	O短大学生(12)	3～5歳児(60) 保育者(16)	「表現実践」「ゼミナール」授業学外実践	研究代表者、 O短大研究者
2019年	神奈川県	T大学短期大学部	音楽室	新採用幼稚園教諭研修受講者(32)		教員研修プログラム	研究代表者
2021年(8月)	静岡県	T大学	音楽室	教員免許更新講習受講者(11)		免許更新講習内容	研究代表者
2021年(11月)	静岡県	T大学	音楽室	望月ゼミ学生(5) Z・H私立幼稚園連合会教員研修受講者(20)		教員研修プログラム、「教材開発演習ゼミ」	研究代表者
2021年(11月)	静岡県	T大学附属小	T小学校講堂	望月ゼミ生(10)	附属T小学校1年生児童(41)	T大学授業改善等研究費助成研究	研究代表者
2021年(12月)	静岡県	T大学附属小	T小学校講堂	望月ゼミ(10)と附属T小1年生児童(41)		T大学授業改善等研究費助成研究	研究代表者
2022年(10月)	静岡県	T大学	音楽室	「教育楽器演奏論」受講学生(13)		「教育楽器演奏論」	研究代表者
2022年(12月)	静岡県	T大学附属小	T小学校講堂	望月ゼミ学生(5) 教育学部2年(8)	T小学校1年生児童(43)	T大学共同研究費助成研究	研究代表者
2022年(12月)	静岡県	T大学附属小	TT小学校講堂	望月ゼミ(5)、教育学部2年生(8)と附属T小1年生児童(43)		T大学共同研究費助成研究	研究代表者

表1に示す通り、2019年度で保育者養成大学の幼稚園教諭免許取得に関わる必修科目「音楽表現」の授業教材として用いた「合奏劇」は、授業から保育現場での実践（望月，山本 2020）<sup>5</sup>や幼稚園教諭の研修プログラムに発展した。その後筆者は、幼小接続を意識した小学校1年生児童が幼児期に出会う教育楽器の演奏体験を可能とする教材と研究を進めるに至った（望月，山本 2021）<sup>6</sup>。2021年9月（当時），T大学教育学部附属小学校の1年部担任教諭2名（本研究の共同研究者である土橋，池上）に実施案を示し，教育学部学生と小学校児童による協働実践が可能となった（望月，土橋，池上 2022）<sup>7</sup>。保育者養成授業教材として活用を始めた「合奏劇」であったが，上演毎に実施したアンケート調査の結果から，その教材性に期待を持ち，教材を活用する対象を保育学生，幼稚園教諭，保育士，教育学部学生，小学校1年生児童に広げ，上演方法や実践方法の可能性を探り続け，これまで必然的に研究を継続してきた背景がある。

## 1.2 研究の背景Ⅱ：器楽の活動と「合奏劇」の協働実践

小学校学習指導要領「音楽」小学校低学年のA表現(2)器楽の活動ア～ウのうち，アでは，①器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，曲想を感じ取って②表現を工夫し，③どのように演奏するかについて思いを持つことと示している。また気付かせたい事項として，イの（イ）④楽器の音色と演奏の仕方との関わりを示し，身に付けたい技能では，ウの（ア）⑤範奏を聴いたりリズム譜などを見たりして演奏する技能，（イ）⑥音色に気を付けて，旋律楽器及び打楽器を演奏する技能，（ウ）互いの楽器の音や伴奏を聴いて，音を合わせて演奏する技能を挙げている<sup>8</sup>。

文中に示した下線部分①～⑥において最も身に付けたいことは，下線③のどのように演奏するかについて思いを持つことである。思いを持つことに導く実践的な指導事項が③を除く①～⑥である。下線①では児童が実際に楽器を手に持ち，その楽器の音色がいかにか奏法と深く関わっているかを視覚と聴覚を使って理解すること，下線②④では児童自身が思い思いに楽器のティンカリングを行う体験を重ね，指や手のひら，腕や身体の動きを通して得る知識や技能を確かめること，下線⑤では動画や生演奏を目の当たりにすること，下線⑥では合奏体験を通してお互いの音色を聴き合うことであり，これらの体験過程を多く取り入れる必要性がある。この活動を存分に行わない限り，下線③が示す児童がどのように演奏するかについて思いを持つことは難しいのではないか。更にこれらの活動を，楽しい活動，新たな発見のある活動，興味関心を引き出す活動として実践するためにはどのような方法と環境が必要であるのか。

また，低学年の児童における器楽の活動（指導計画の作成と内容の取扱い）では，次のように示されている（望月抜粋）<sup>9</sup>。

- ・「楽器を演奏することが好き」と思えるようにする。
- ・興味・関心を持って取り組むことができる器楽の活動を進めること。
- ・楽器に慣れ親しみ，一人や集団での器楽表現の楽しさを十分に味わう活動によって演奏することが更に好きになるように指導を行う。
- ・色々な表現の仕方を体験できるようにする。

・音色の変容の理由が奏法の工夫にあることを教師が具体的に伝える。

文中に示した波線部分では「〇〇するように」といった抽象的表現が見られ、これらの活動や体験を網羅した教師が計画する具体的活動や具体的に伝える実践方法が極めて重要になる。そこで研究代表者（望月）は、これまで保育の現場を中心に活用してきた「合奏劇」を児童や教育学部学生の双方に働きかける実践方法を試みるに至った。

### 1.3 研究目的と研究方法

本研究では、2021年度に初めて行った1年生児童と学生による協働実践課題をもとに、2022年度に実施した1年生児童と学生による協働実践の取り組みについて、(1)2022年度に児童と協働実践を行った学生の事後記述をもとに考察する。また、第2の「合奏劇」開発に向けて行った、(2)2022年度に初めて実施した児童43名のアンケート調査結果、(3)児童の事後感想文記述内容をもとに、新たな第2の「合奏劇」開発に着手する手がかりを得ることを目的とする。（望月たけ美）

## 2. 2021年度「合奏劇」協働実践結果の振り返り

児童の活動において、2021年度の担任であった土橋・池上らは、児童の事後感想文と発言から児童の様子を読み取り分析を行った。土橋・池上らの分析結果として、技能・知識面においては、学生の楽器アピール場面によって、担当する楽器や演奏へ関心が高まり、楽器の持ち方や演奏の仕方を知ることによって児童がより一層楽器への興味を深めたことがわかった。表現等においては、リズムを身体で感じてリズムに乗って歩く児童がいたことがわかった。また、言葉で表現する音が苦手な児童も楽器の力を借りて力いっぱい表現していたり、同じ楽器の同士で劇に参加することで人前にスムーズに出ることができたり、演奏してみると拍手を貰えた経験が「楽しかった」という思いに繋がったことがわかった。

学生においては、教材の価値を感じ、自身が楽器の魅力を知る機会となり、演奏が上達していく喜びや演奏表現を追求して楽器自体になり切ることができたという記述があった。また就学前の児童の音楽経験度や発達段階への気付き、児童の理解力や対応力、想定以上にオリジナルのリズムを打つことができる児童がいることへの驚きなど児童理解に繋がったとする記述があった。更に、自身の音への感度や演技力の向上や児童の力になる教材選択の必要性を今後の課題とした学生がいたことが分かった。児童と学生の協働実践方法においては、2日目の活動にしたことで、児童が2日目の活動を期待して心待ちにしたこと、学生においては、両日の期間が一週間あることから、1日目の反省や課題を一週間後に活かしていく時間として設定時間や機関が適当であったことがわかった。

一方で、児童の音楽を形づくっている要素との関連の記述では、音色、強弱、音の重なり、拍との関わりが見られた。音色では、色々な振り方で変化する（ハンドベル）/一回鳴らすと遠くまで響く（トライアングル）/クリスマスのような音（鈴）、強

弱では、大小の音が出る・レベルアップする（カスタネット）、音の重なりでは、低い音・高い音・普通の音・きれいな音・いろんな音が合わさってとても素敵（全楽器）、拍では、みんなノリノリ・リズムに合わせて踊った（全楽器）である。また、いい歌を教えてもらった（劇中歌）、楽器の持ち方では難しかった（トライアングル）という記述も見られた。児童が、担当した楽器の特性や魅力、挿入歌の良さ、奏法の難しさを感じていることが見受けられる記述である。「合奏劇」の活動を通して、個々の児童が自分の担当する楽器だけでなく登場する楽器の音色や音を出す奏法の工夫に多くの気付きを持ったことが分かる。

### 2.1. 次年度への課題

2021年度の協働実践の結果から、共に実践する学生が児童の気付きや発見に共感し、(1)協働実践において児童の「演奏に対する思い」から出る発言やアイデアを生かしたり引き出したりしながら、担当する楽器の良さをより一層引き出していく必要性があると分かった。そこで2022年度実践に向けて、(2)学生が活動の中で児童と十分に対話し、協働実践に余裕を持てるように実践方法やねらいを見直す必要があることが分かった。また、(3)学生が教育楽器演奏論の授業での楽器理解をもとに、範奏となる表現力を高め、事象に即興的に対応できる力を向上させていくために、自身の表現や実践を客観的に評価し、主体的に改善を繰り返していく過程を設けることが課題となった。(4)学生が範奏や演技、指導を創意工夫して行うことが、児童の活動にどう反映しているのか、観劇後と協働実践後に2回の児童にアンケートを実施し確認する。

（望月たけ美）

### 3. 2022年度「合奏劇」協働実践

2022年度の協働実践は、全3時間構成での実践となった。4時間構成で行った2021年度に比べ1時間分少ない。実践計画を【表2】に示す。

【表2】2022年度の実践計画

時間	体験活動（1年生児童43名）	段階	実践（学生）13名（ゼミ生5名、2年生8名）
1 劇の上演 12/7 9:20-10:05	●「合奏劇」の観劇 ・観劇後に劇の登場人物楽器の演奏体験	30分	●『合奏劇』の上演 ・楽器の様々な奏法や表現方法をもとに演じて伝える ・楽器体験コーナーの設置と児童との交流
		15分	
2 12/14 8:25-9:10	●登場人物の歌に乗って演奏しよう ※楽器の担当は決定済み ・拍節のないリズムの中の音表現 ・歌詞のオノマトペとリズム表現 ・担当楽器の奏法や音色を工夫する ・担当する楽器の役割を考えよう	45分	●担当楽器グループに分かれ指導する ・児童への演奏・演技指導 ・挿入歌の歌指導 ・セリフの分配 ・児童のアイデアや発言を取り入れる
3 協働実践 12/14 9:20-10:05	●『合奏劇』の一員になって演じよう ・自己アピールをしてみよう ・挿入歌に参加しよう ・学生や友達のを聞いてみよう	45分	●児童参加型『合奏劇』の協働実践 ・実践後の意見交換、挨拶

表2に示すように、基本的な実践の流れは2021年度の実践方法を踏襲している。1時間目の2022年12月7日では、2021年度と同様でまずは学生が「合奏劇」を上演し児童が観劇する。その後、児童は登場人物となった全ての楽器とのふれあいを体験する。一週間後の2時間目の12月14日では、各楽器グループに分かれ、児童は楽器担当の学生から楽器奏法、演奏表現、挿入歌、セリフ、動きについて指導を受ける。引き続き3時間目では、児童と学生が協働して「合奏劇」を上演する計画である。2021年度に対する変更点は、表2の12月14日内の下線・太字部分を加えた点である。2.1次年度への課題の(1)と(2)を反映させ、児童においては、「担当楽器の奏法や音色を工夫する」「担当する楽器の役割を考えよう」、「学生や友達の音を聴いてみよう」の3点で、学生においては「児童のアイデアや発言を取り入れる」である。

### 3.1 2022年度の実践学生側の取り組み

2021年度はゼミナールの学生（3、4年生10名）による実践であったが、2022年度の実践メンバーは13名（4年4名、3年1名、2年8名）に変更した。このねらいは次の1～3の3つである。1は、2021年度実践メンバーが経験を生かして後輩となる2年生に多くを伝授する機会となること、2は、先輩と実践する機会を持ち「合奏劇」の教材性の共有理解のもとで話し合いながら表現を工夫する、3は、2年生が「合奏劇」のバトンを受け継ぎ次年度以降に実践を継続することである。

#### 3.1.1. 実践学生メンバー決め

2022年度実践メンバーは、2021年度実践学生の中の4名と2022年度実践学生9名である。2021年度実践経験のある4年生4名を主要メンバーとし、新たに実践する9名に実践体験を伝える。9名は3年生1名、2年生8名の構成である。2年生の8名は「教育楽器演奏論」授業内で既に「合奏劇」を実践している。「教育楽器演奏論」は13名の受講者であるが、上記8名を除く5名は附属T小学校の観察実習があり、2022年度実践メンバーの2年生は8名となった経緯がある。

2021年度では登場人物となる各楽器は1名が担当したが、2022年度ではタンブリン2名、トライアングル1名、鈴3名、カスタネット1名とし、タンブリンと鈴は実践経験のある4年生と組み、トライアングルは昨年度のトライアングル役の4年生から演技指導を受けた。ハンドベルは実践経験のある4年生を含む3名で行った。

2021年度実践学生と2022年度実践学生が「合奏劇」上演と協働実践に向けて、2.1次年度への課題の(3)の課題を踏まえ、2021年度と2022年度実践学生が協働することで実践方法を伝授・改善していくこと、新たなメンバーでの上演を体験すること、2023年以降の実践に継続していく後継学生を育てることをねらいとした。

#### 3.1.2. 2021年度実践録画データを確認して改善点を抽出する

2021年度実践学生4名（2022年度の主要実践メンバー）は、2021年度実践録画映像を確認し、各自が課題・改善点を話し合う時間を設けた。実践映像を振り返ることで、自身の課題や改善点を改めて確認すること、共に演じる同楽器メンバーに伝授すること、複数人で実践する方法を前もってイメージできるようにした。

### 3.1.3. 実践学生メンバー同士で表現や見せ方、演じ方を話し合う

2021年度実践学生4名は、2022年度実践学生に改善したい点を伝え、演技、セリフの言い方、楽器演奏、楽器のアピール部分の表現を意見交換しながら工夫し、協力して練習を行う。1名から複数名で演じるようになったタンブリンや鈴は、舞台での立ち位置、複数名での見せ方（同時奏、交互奏、応答奏、反復奏など）を話し合う。

### 3.1.4. 実践学生側の取り組み—上演後から協働実践までの1週間—

「合奏劇プロジェクト」名でTeamsを作成し、1時間目（12月7日）の上演録画をアップロードし、実践メンバー13名と、不参加の「教育楽器演奏論」受講者5名で共有できるようにした。実践者は録画映像を観て自己の課題を抽出し、1週間後の協働実践に向けて練習に反映できるようにした。また、2年生13名は、「教育楽器演奏論」授業の課題として、実践・不参加両学生に上演録画視聴後レポートを課題とした。

### 3.1.5. 実践学生側の取り組み—協働実践後の振り返り—

Teams「合奏劇プロジェクト」に、2、3時間目（12月14日）の児童と学生の上演録画をアップロードし、実践メンバーと「教材開発演習」受講学生全員に共有した。実践した2年生には、事後レポートを提出してもらった。

## 3.2. 2022年度の小学校1年生児童担任側の取り組み

1年生担任らは、「合奏劇」による音楽体験を「スペシャル音楽授業」と名付け、12月にスペシャルゲスト（＝実践学生）によって行なわれることを事前に児童に伝えた。日頃から全学で使用するT小学校講堂での実践となるため、講堂の事前予約や他学年との施設使用の調整を行った。2日間にわたる「スペシャル音楽授業」までの取り組みでは、コロナ感染症対策、児童の気持ちを高めながら過ごす1週間の日々など、担任ならではの記述することができない児童との関わりがあったと十分に推測できる。

### 3.2.1. 児童側の取り組み—観劇後まで—

12月7日の観劇後、楽器との触れ合い体験を行う児童の様子を見ながら、質問項目を決めて児童アンケート1（観劇後）を作成、観劇したその日のうちにアンケートを実施した後、全アンケートをPDF化し、実践学生側と共有できるようにした。

児童の記述に対し、コメントや良い気づきの部分等に線を入れている。

また、次週の協働実践で担当したい楽器について児童と話し合い、担当楽器グループ分けを行う。協働実践に向けた使用楽器の準備を行う。

### 3.2.2. 児童側の取り組み—協働実践後—

12月14日の協働実践後、児童アンケート2（協働実践後）のアンケートをその日のうちに実施、印刷して共有できるようにした。 （望月たけ美）

#### 4. 2022年度の研究成果 I

2021年度の実践は、児童と学生の協働実践計画の初回であり、前例として示すデータ等が存在しないことから、学生は基本的に研究代表者（望月）の活動計画や提案をもとに実践している。2021年度では、実践する学生10名は筆者（望月）のゼミナールの学生（3年5名、4年5名）である。10名に実践計画を示すにあたり、①児童が幼児期から継続して体験する教育楽器を登場人物とした「合奏劇」の教材性の理解、②小学校1年生の学習目標における教育楽器の理解、③「合奏劇」の登場人物である各教育楽器の特性・素材・形状・音色・奏法を児童に伝え、児童が楽器の一員となって劇に参加できるように指導することの3つを活動のねらいとした。

##### 4.1. 2022年度実践学生への mission

2022年度は、学生への mission を下記の内容に変更した。

【表3】2022年度実践学生への mission

**【12月7日 学生による上演】**

2021年度の実践録画映像を踏まえ、実践学生各自が楽器の特性が伝わる範奏や演奏表現を向上させ、協働実践の日まで伝え方や見せ方を研究し工夫する。

**【12月14日 児童と学生による協働実践】**

- ・担当する楽器の特性・素材・形状・奏法・音色に児童が体験を通して気づいていく過程を意識し、協働実践ではどの児童も楽器の一員となって「合奏劇」に参加できるように指導する。
- ・協働実践では、1年生児童の発言やアイデア、「やってみたい」気持ちを大切に、楽器アピール部分を一緒に創り上げる意識を持って実践する。

学生が授業等で教育楽器について深めた理解を活用し、学生が児童と関わる中で自ら工夫して表現していく力、与えられた対象に対して即時的に即興的に対応していく力を向上させる必要があると考えた。

##### 4.2. 2022年度実践結果—実践学生の考察

実践学生の振り返り記述をもとに、次の2つの観点で考察する。

観点①：実践録画映像を活用して客観的に自分の演技を捉え、教育楽器の演奏表現の向上が見られ、達成感につながったか。観点②：協働実践に向けて児童への即時的対応を求められる中で、学生が自分自身の取り組みに手応えや課題を見い出すことができたか。

2021年度では一つの楽器を1名担当で実施したが、2022年度では、12月7日の学生による上演では、トライアングルとカスタネットを除くタンバリン、鈴、ハンドベルは2～3名担当に変更したことから、メンバー内で上演日間際まで立ち位置や動き、楽器のアピール部分の見せ方や奏法について工夫し、2021年度に実践経験のある先輩メンバーと協議を重ねる学生が見られた。観点①と観点②に関連する12月14日の協働実践事後の学生の振り返り記述の抜粋を示す。

【表4】観点①に関連する記述（望月抜粋）

記述 A：楽器の魅力を感じよう、伝えようとするほど、こだわりや情熱が強くなり、試行錯誤を重ねることによって自分にしか出せない音を見つけることができるのではないかと考えた。楽器のアプローチをする場面でも下半身を使っていないのが気になったので、もっと身体全体を使って表現したいと感じた。一番ポイントの「どの音もみんな大切なんだよね」はもっとゆっくり抑揚をつけて言うと、更に各楽器の良さが伝わったのではないかと考えた。

記述 B：練習すればするほど上達していくのを実感し、楽器を好きになっていった。自分が楽器の魅力を見つけることで、児童にも知ってもらいたいという気持ちが大きくなったため、楽器に対しても魅力を知るための研究が大切なことを学んだ。

記述 C：音量の違いを感じてもらうために、叩く指の数を増やしていき音量がだんだん大きくなるような工夫をした。

記述 D：先輩の実践映像を観て、児童が楽器の奏法に「そんな叩き方があるんだ！」と気付くようにするためにどうしたら面白いのか、どうしたら新発見が出来るのかを考えた。

記述 E：体育館という広い空間だったため、セリフが思った以上に聞こえなかった。思っている2倍以上の音量を出さないといけない。児童の興味関心を得るには、児童と目を合わせたり、表情や音量を調節したりしながら学生自身が役に入り切ることが大切であると考えた。先輩方の楽器の鳴らし方や児童の前での態度を見習って次の実践に繋げたい。

観点①に関する記述 A, B, C では、上演に向けて練習を重ねることで担当楽器の理解が深まり、更なる理解のための研究や試行錯誤しながら学生自身が自分だけの音色を見つけ、児童への伝え方を工夫していくなど、目標を持って意欲的に取り組んだことが分かる。記述 D からは、幼児期から経験している馴染みある楽器に対し、児童が新発見できる奏法や音色への強い探究心が読み取れる。記述 A, E では、実践録画映像確認により児童への伝え方の改善策として、セリフの抑揚や音量、目や表情や身体の使い方を改善するに留まらず、「合奏劇」のストーリー性を踏まえて役になり切ることの大切さを通過していることが分かる。

【表5】観点②に関連する記述（望月抜粋）

記述 F：実際に楽器を体験することで持ち方や打ち方を変えることで音色が変化することに気づき、自分で考えているんな鳴らし方で楽器を演奏していた。その中で自分の好きな鳴らし方を見つけ、劇中のアピールポイントではそれを自分なりに表現していた。自分の一つ一つの動作や発言、表情をさらに工夫して児童たちに楽しんでもらえる劇を完成させられるよう頑張りたい。

記述 G：3人の児童が楽器の中についている球体に興味を持ち、触り始めたため、「それは何のためについているんだろうね」と聞くと「これが当たっているんだね」「だから音が鳴るのか」と楽器の構造について気づきを見せていた。「何で同じ形なのに音が違うの」と聞かれた。しかし、私はその原理については知らなかったの、「何でだろうね、不思議だね」と濁した返し方しかできなかった。

記述 H：布の上に置かれた楽器の形状を見て、楽器の大きさによって音色が変わることに気付いた児童がいた。

記述 I：練習時間に3つの奏法（普通に4回たたく、トレモロ、4ビート）を教え、その中から好きな奏法を選んでもらうことにした。それぞれの奏法が交代で来るように配置し、3種類の音を組み合わせた音楽を作ることをイメージしていたが、児童の選んだ奏法に偏りが出てしまった。私はトレモロを選択する児童が多いと予想していたが、4ビートを選ぶ児童の方がはるかに多かったことが意外であった。私が上演時にビートを多用したパフォーマンスをしたため、ビートがカッコよく見えたのではないかと推測する。

記述 J：児童にアピールタイムを考えてもらうために、鳴らしたい！という心から出てくるものを好きに表現していいんだよ！ということ意識して伝えていくと、児童たちははじめたどどしくも短いフレーズで鳴らしていたが、何度か繰り返すうちに、即興でリズムを作り表現を付けることに凝り始めていて、音楽を楽しんでいてくれるのを目の当たりにできてとても嬉しかった。更には「これをして、あれをして！」と伝えてくれる様子も見られ、とても有意義な時間を過ごせたと思う。これらの結果を得られたのも先輩の児童への声掛けや接し方がとても素晴らしいものでありとても勉強になった。

記述 K：児童は友人と教え合い、意見を交流しながら楽器の奏法を確認して技能を向上し合っていた。また児童は学生の範奏を真似して演奏を通して交流した。私はホワイトボードを使って視覚的にリズム譜や台詞が分かるように工夫した。しかし、時間配分がうまく出来ずに最後は台詞を教え込む形になってしまったため、あらかじめ時間内で何をするかを明確にし、児童の実態を踏まえて考えることが反省点であった。

記述 L：各楽器のアピール場面で友達の実演に感心して拍手を送る姿に感動した。

観点②に関する記述 F では、楽器のアピール部分において児童に「自分の好きな鳴らし方」を考えさせたことが伺え、児童の楽しさを引き出すために動作・発言・表情を工夫する必要性を感じている。記述 G, H は、楽器の構造に興味を持った児童に質問された際、楽器の音が鳴る仕組みについての的確に回答できなかったことを記述

している。記述Iは、奏法種の児童の選択結果と自分の予想との相違を受け、上演時に見せたパフォーマンスが児童に印象付けたことを推測し、最初の奏法との出会いの重要性を感じ取っている。記述Jは、自分の終え掛けが児童の意欲や関心、創意を引き出したことに手応えを感じ、共に活動した先輩の児童への声掛けから「音楽を楽しんでいる」児童の姿を生むために児童との関わり方がもたらす影響がいかに大きいかについて記述している。記述Kでは、児童が友人や学生と関わりながら奏法を学ぶ姿を捉え、児童の様子からリズムや台詞を伝えるための工夫を凝らしたが、半面で時間配分に課題があったことを記述している。

観点①「実践録画映像を活用して客観的に自分の演技を捉え、教育楽器の演奏表現の向上が見られ、達成感につながったか」では、観点①の結果から、実践後に録画映像をすぐにアップロードすることで学生が客観的に自身を振り返り、周囲のメンバーの表現の工夫に刺激を受け、即時的に練習や表現の工夫に反映させていることが伺えた。2022年度の取り組みとして、Teamsに共有チームを作成して実践録画映像をアップロードし、学生が客観的に自分の表現を研究改善する機会を設けたことが、学生が映像を通して見えた自分の表現に対し改善意欲を持ち、見せる工夫や伝えるための工夫を行うことで演奏表現技術を向上させたと考えられる。

観点②「協働実践に向けて児童への即時的対応を求められる中で、学生が自分自身の取り組みに手応えや課題を見い出すことができたか」では、観点②の結果から、児童が自分の想像をはるかに超えてくることに驚き、自分の思うように動かない1年生の実態や興味の方向性に対し、学生が声掛けや道具を用いて懸命に向い合っていることが読み取れた。また児童の思いがけない選択や発言、気付きに驚き、楽器の音の鳴る仕組みへの理解を深める必要性、即時に応える知識や発想の必要性を課題として見出したことが分かった。観点②の記述Lでは、友達の表現を称え拍手を送る児童の姿から、楽器の一員となって表現を互いに見せ合う協働実践のねらいを感じ取っていることが見受けられる。これらの結果から、学生が即時的に創意工夫をしなければ協働実践に至らない状況を生み出す「合奏劇」が、協働実践の実践方法や学生へのmissionによって実践内容を深め、学生の自主性、表現力、対応力を向上させることに繋がるのが明確になったと考える。また、2021年度では研究代表者（望月）の指示や指導のもとで学生が動く活動が主であったが、2022年度では学生が話し合いながら主体的に実践に関わることが確認できたといえる。（望月たけ美）

## 5. 2022年度研究成果Ⅱ

2021年度では実施していない児童へのアンケート調査を、2022年度では2回に渡って実施した。アンケート調査の目的は、児童の回答結果から、本論文1.2 研究の背景Ⅱ：器楽の活動と「合奏劇」の協働実践に示す器楽の活動の目標に働きかける実践内容であったのかを明らかにすることである。また、劇を通して様々な楽器に触れる中、楽器の多様性や相違からくる面白さ、特性の違う楽器がそれぞれに魅力ある音色

を持ち、合奏する上でどの楽器も欠かせない役割を持つことに気付いていくストーリーへの感想をもとに、道徳的視点で児童がどのように受け止めているのかを調査する。更に、第2の「合奏劇」教材開発のための手がかりを得ることを目的とする。

### 5.1. 調査対象とデータ取得

#### (1) 児童アンケート調査1に対する調査対象とデータ取得

2021年度T大学教育学部附属T小学校1年生児童44名を対象に、「合奏劇」観劇後に質問紙によるアンケート調査を実施した。2022年12月7日に取得したアンケート結果を分析対象データとする。回収数44件、有効回答数44件、100%。

#### (2) 児童アンケート調査2に対する調査対象とデータ取得

T大学教育学部附属T小学校1年生児童43名を対象に、「合奏劇」を協働実践した後に質問紙によるアンケート調査を行った。2022年12月14日に取得したアンケート結果を分析調査対象データとする。回収数43件、有効回答数43件、100%。

### 5.2. 調査方法

#### (1) 児童アンケート調査1の調査結果と考察の方法

5.1.に示した児童アンケート1では、12月7日の「合奏劇」観劇後の楽器体験コーナーを経て、児童がどのような感想を持ったのか7つの項目で質問している。本研究では、Q5「来週、自分がやってみたい楽器は何ですか」を調査結果として取り上げ考察する。

#### (2) 児童アンケート調査2の調査結果と考察の方法

5.1.に示した児童アンケート2では、12月14日の「合奏劇」協働実践後にどのような思いを持ったのか5つの項目で質問している。本研究では、Q2「楽器を鳴らす時、どんな気持ちで音を出しましたか」、Q3「音を出す時に工夫したことはなんですか」を調査結果として取り上げ考察する。

#### (3) 「児童が合奏劇のストーリー性をどう捉えているか」関連調査結果と考察の方法

本研究では、新たな第2の「合奏劇」考案に向けての基礎調査を目的の一つとしている。「合奏劇」のストーリー性をどのように捉えているのかについて、児童アンケート1のQ4「カスタネットくんは、始めどんな気持ちだったと思いますか」、児童アンケート2のQ5の感想記述から関連記述を抽出する。

#### (4) 第2の「合奏劇」教材開発への基礎調査

児童アンケート2のQ4「劇の仲間に入ってほしい楽器や音は何ですか」の結果を基礎調査とする。

#### (5) 感想記述からの読み取りの視点

- ①各楽器の特性に気付き、関心を持てたか。
- ②学生との協働実践により、楽器の奏法を工夫して音を出す面白さに気付けたか。
- ③「合奏劇」のストーリー性から、仲間外れにされてしまう寂しさ、自分の音色の良さに気付かせてくれるハンドベル（雨の小人）の存在、個々の楽器に特性と良さがあることに考えを持ち、合奏する楽しさを味わうことに繋がったか。

#### (6) 児童の様子からの読み取り方法

「スペシャル音楽授業」における協働実践前後の児童の様子を、当時の担任（2022年度1年2組）であった土橋が読み取り考察する。

### 5.3. 倫理的配慮

児童へのアンケート実施，アンケート結果や感想文データ，実践録画映像データの使用については，T小学校校長に研究の目的と概要を説明し承諾を得ている。

（望月たけ美）

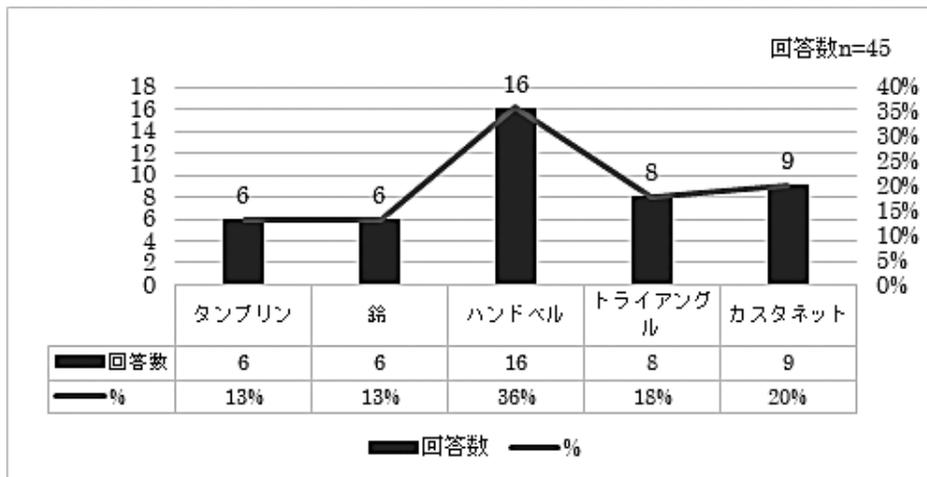
## 6. 児童アンケート調査1の結果と考察

児童アンケート調査1では、前述のように全7項目で質問しているが、先にQ5,Q7の調査結果を考察する。

### 6.1. Q5「来週自分がやってみたい楽器」に関するアンケート結果

先に示すQ5の「来週自分がやってみたい楽器は何ですか」の結果では、劇に登場する5種の楽器について質問し、学生による「合奏劇」の観劇後に、次回の協働実践で担当したい楽器について得た回答である。12月7日の観劇後に楽器体験コーナーによってすべての楽器を体験し、次週担当したい楽器を選択している【図1】。最も多かったのはハンドベルの16名で、全体の36%であった。

【図1】Q5：「来週、自分がやってみたい楽器はなんですか」回答結果



Q6では、Q5で選択した理由について質問している。ハンドベルを選択した16名の選択理由を示す【表6】。小学校学習指導要領第3章1第1学年及び第2学年の目標及び内容に関わるカテゴリーと、A表現(2)器楽の活動で身に付けたいとする事項指導計画の作成と内容の取扱いと関連付けた小カテゴリーごとにまとめた。

【表 6】 Q6 から児童がハンドベルを選択している理由

<p>【知識：曲想と音楽の構造との関わり】 ①ベルはやったことがなかったから。きいた時にきれいだったから、②ハンドベルを鳴らしたのが初めてだったからです、③前からベルの音が好きでずっとやりたいと思っていたから、④おもしろそうだから ⑤楽しそうだからです</p>
<p>【技能：楽器の音色と演奏の仕方との関わり】 ⑥いい音だったから、⑦きれいな音だったから、⑧音がひびいてきれいだから、⑨なんかかわいい音だったからです、⑩チリーンと音が鳴ってきれいだから、⑪いい音が出ていい気持ちになるからです、⑫いい音だからです、⑬ベルはドレミファソラシドの音がきれいだから</p>
<p>【技能：互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する】 ⑭幼稚園の時ベルをやったことがあります。その時担当したのはドの音です。みんなと一つの音が作れるからです、⑮みんなで一つの曲を作りたいから</p>
<p>【技能：音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する】 ⑯上手にできるようになりたいからです</p>

16名の記述を項目ごとに分けると、知識・技能に関する事項として捉えられると考えた。また、児童⑭と⑮では、「みんなと一つの音が作れる」「みんなで一つの曲を作りたい」といった記述があり、これは器楽分野における「思考力、判断力、表現力等」にも該当すると考えられる。次週の協働実践で、ハンドベル役になりたい児童が圧倒的に多かった理由として、児童①～⑤の記述にある「演奏したことの無い楽器」への「興味」、児童⑥～⑬の記述にある「音色」が引き出した「関心」があるといえる。

## 6.2. Q2「楽器を鳴らす時、どんな気持ちで音を出しましたか」のアンケート結果

アンケート結果2は、学生との協働実践による「合奏劇」を終えた後に行った調査であり、Q2は協働実践に参加した43名の児童の記述をもとに、楽器ごとの児童の記述を【表7】にまとめた。

【表 7】 Q2「楽器を鳴らす時、どんな気持ちで音を出しましたか」の楽器ごとの記述内容

<p>【ハンドベル】 うきうきした気持ち、うまく音を出せるかなーって思いながらです、<u>響く音</u>、<u>きれいな音を出す気持ち</u>、<u>きれいな音で演奏します</u>、<u>楽しい気持ちで音を出しました</u>、<u>いい気持ちで鳴らした</u>、<u>上手に鳴らせるかな</u>、<u>みんなを楽しませてうきうきさせること</u>、<u>良く聞こえるように鳴らした</u>、<u>自分の出番の時緊張した</u>、<u>楽しいと思った</u></p>
<p>【タンブリン】 嬉しい気持ち、がんばってやろうと思う気持ちでやった、ドキドキした気持ち、楽しい気持ち、ドキドキした、うきうきする気持ち、<u>いい音を出したいという気持ち</u>、<u>楽しい気持ち</u></p>
<p>【カスタネット】 楽しい気持ち、ドキドキして音を出しました、<u>きれいな音を出したいと思</u>いました、<u>楽しい気持ち</u>、<u>きれいな音が出るとうい</u>いな、<u>楽しみな気持ち</u>、<u>すてきな音が出せるかな</u>、<u>緊張した</u></p>
<p>【鈴】 劇をがんばるぞとゆう気持ちでした、楽しい気持ち、鈴がいっぱいついているな、<u>楽しい気持ちで鳴らした</u>、<u>緊張している気持ち</u>、<u>同じところはみんな揃えて弾く</u></p>

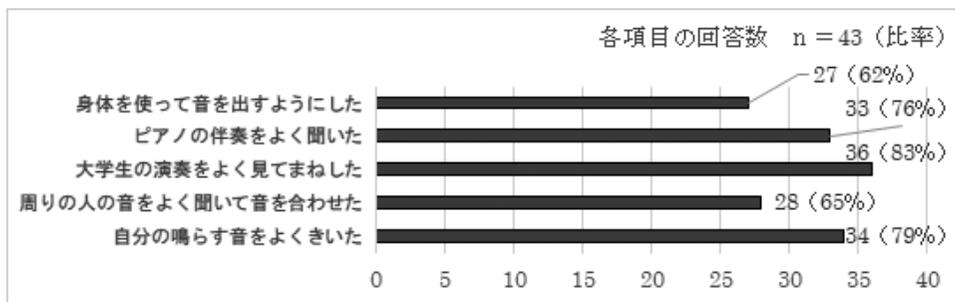
【トライアングル】楽しい気持ち、楽しみ、強くならそうと思った、右手にトライアングル持っ  
て、左手にビーターを持って弾きました、緊張をした気持ち、はずかしい、わくわく、演奏  
しているときに楽器に手が触れてしまうと音が変わってしまうので気を付けながら弾きまし  
た、王様になったつもりで弾きました

ハンドベルでは、「きれいな音で」「響く音」「良く聞こえるように」といった楽器の音色の特性を意識した記述に留まらず、「いい気持ちで」「みんなを楽しませてうきうきさせる」など、音色の良さを感じ取り周囲に伝えたいという思いを持ったことが分かった。タンブリンでは、「嬉しい」「ドキドキ」「うきうき」といった表現することを楽しむ記述が多く、タンブリンのキャラクター性を意識して表現しようとしたと考えられる。カスタネットでは、カスタネットが「素敵な音だね」と言われる場面を意識した「すてきな音が出せるかな」という記述があった。鈴では、「同じところはみんな揃えて弾く」という記述があり、学生が児童との実践の中で声を掛けていたことが伺える。トライアングルでは、楽器の持ち方やビーターという名称、演奏時の留意点などに気付き、楽器演奏に関わる知識を深めたことが伺える。6.1. Q5の来週やってみたい楽器として選択した楽器に対して、担当した楽器のキャラクター性や奏法、音色に気持ちや思いを持って児童が劇に参加していたことがわかった。

### 6.3. Q3「音を出す時に工夫したことはなんですか」のアンケート結果

Q3は、「音を出す時、身体を使って音を出すようにした」、「ピアノの伴奏をよく聞いた」、「大学生の演奏をよく見てまねした」、「周りの人の音をよく聞いて音を合わせた」、「自分の鳴らす音をよくきいた」の5つの項目から選択して回答し、複数回答可した【図2】。

【図2】Q3「音を出す時に工夫したことはなんですか（複数回答可）」の回答結果



「大学生演奏をよく見てまねした」が最も多い結果であり、83%の児童が大学生の演奏を「よく見てまねした」ことがわかった。「範奏」における演奏技能や表現力を重視していく必要性を改めて感じる結果であった。2022年度実践では「2021年度の実践録画映像を踏まえ、実践学生各自が楽器の特性が伝わる範奏や演奏表現を向上させ、協働実践の日まで伝え方や見せ方を研究し工夫する」ことを学生への mission としていたことから、学生の工夫や表現が児童の楽器奏法への興味関心を引き出すこ

とに繋がったと推測できる。一方で、「身体を使って音を出すようにした」児童は全体の62%であり、「合奏劇」の特徴である「楽器自体になり切って演奏する」ことに到達できないまま実践が終わったことが伺える。限られた授業時間の中では実際に難しく、今後の実践方法や第2の「合奏劇」開発において検討する必要があると考える。また、「周りの人の音をよく聞いて音を合わせた」児童は全体の65%で、小学校学習指導要領「音楽」小学校低学年のA表現(2)器楽の活動ア～ウのうち、ウの(ウ)互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能を身に付けることに繋がる活動として課題が残る結果となった。

#### 6.4. 「児童が合奏劇のストーリー性をどう捉えているか」に関する調査結果

カスタネットくんが仲間外れにされたことについて、児童アンケート結果1のQ4「カスタネットくんは、始めどんな気持ちだったと思いますか」に対する回答を児童44名から得た。この結果をもとに考察したところ、「悲しい」「さみしい」「いやだ」「カスタネットの気持ちを代弁」「その他」に分類できることがわかった。【表8】

【表8】カスタネットくんは、始めどんな気持ちだったと思いますか

児童の回答記述	回答数 n = 44	児童の回答記述	回答数
悲しい気持ち	13	いやなかんじでした	1
悲しい	6	いやなきもち	1
悲しい気持ちです	2	いやだな	1
悲しい気持ちだった	1	なんでほくだけなかまはずれなんだろう	2
悲しそうでした	1	なんで？	1
悲しくてしょんぼりしてた	1	どうしてほくは弾けないの	1
楽しかったけど他の楽器さんに音が小さいって言われて悲しんだ	1	小さくて音がいっぱい出ない楽器はどうしてだめなんだろう	1
他の楽器と違ってカスタネットくんは一つの音しか出せなくて悲しい気持ちになった	1	みんなはどうしているんだろう	1
さみしい	1	みんなに音をきいてほしかった	1
さびしい	1	みんなほくを仲間外れにして、みんなどうしてなかよくしてくれないんだろうと想着いて	1
すこしさみしい	1	カスタネットくんはいい音だと思いました	1
一人ぼっちでさみしいと思った	1	ルンルンしていた気持ち	1
楽器たちが一つの音しか出ないと思って、さびしい気持ちだったと思います	1		

「悲しい気持ち」「悲しい」に関連する回答は26名、「さみしい・さびしい」に関連する回答は5名、「いやだ」と表現した解答は3名、カスタネットの気持ちになって答えた回答は8名、「その他」2名であった。「その他」を除く回答では、全体の95%の児童が仲間外れにされたカスタネットの思いに共感していることがわかった。特に

カスタネットの思いを代弁した記述では、カスタネットの立場に立って自分なりの言葉で思いを表現し、カスタネットが仲間外れになったことへの切実な思いと、仲間外れにした他の楽器たちへの問いかけが記述の中から読み取れる。

**【表 9】 児童アンケート 2 の Q7 協働実践後の感想から：カスタネットとの関わり**

①カスタネットくんを怒る時は嫌でした。②カスタネットはタンバリンたちから嫌われました。でもハンドベルが励ましてくれました。③カスタネットくんが他の楽器に音を聴いてもらえない場面の後、ハンドベルの出番です。カスタネットくんを僕たちが励ましてあげました。④もっともっとカスタネットを上手にやりたいな—と思いました。⑤カスタネットの色々な鳴らし方を覚えられてとても勉強になりました。

児童アンケート 2 の Q7 の協働実践の感想では、「合奏劇」の実践を通して感じた記述を 5 点抽出できた。中でも①～⑤は、実際に劇を上演した際にカスタネットの思いを改めて感じ取った記述であり、①では怒る台詞を言うことへの嫌悪を示している。

一方で②や③では、ハンドベル役の役どころを理解し「出番です」と記述している。更に④や⑤では、カスタネットの音色と奏法の関わりに気づき、技能や知識面の向上と意欲を感じさせる記述が見られた。劇のストーリーに登場する楽器の立場や思い、キャラクター性が児童の「どのように演奏したいか」の思いを引き出したことが伺える。  
(望月たけ美)

## 6.5. 2022 年度実践結果—児童アンケートの考察

### (1) 「スペシャル音楽授業」における協働実践前後の児童のアンケート結果や児童の感想文記述をもとにした、1 年部主任教員による考察

今回、大学生が多くの楽器を紹介していただき、それぞれの楽器の良さを知ったうえで、主体的に演奏してみたい楽器を選び、実践できたことは、子供たちにとって大変良い機会となった。

学習指導要領音楽、教科の目標(3)には、「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする」とある。今回の T 大学教育学部音楽専攻による授業は、まさしくこの目標を体現してくれるものとなった。子供たちの感想の中には、より音楽が好きになった、音の音色がとても素敵だった、もっと違う楽器の音も聞いてみたい、初めて知った楽器を演奏することができて楽しかった、2 つの音が重なるところの響きが好きなど、音楽にこれまで以上に親しみをもち、これからさらに音楽を楽しみたいという姿が多かった。また、導入に、楽器の紹介の仕方合奏劇を取り入れてくださったことで、子供たちも楽器そのものに対する思いが強くなり、演奏を楽しむにやる態度を育ててくれた。

子供たちの感想の中には、紹介してくれた楽器に対して感想を言う子供たちもいた。「楽しかったよ、楽器さん」、「トライアングルさんはとてもいい音を出すんだね」、「タンバリンくんのタン、タン、タンという音は、リズムが良くて、とても楽しくなるよ」などの感想が出てきたのは、合奏劇のおかげであると考えられる。小学校の音楽の授業では、なかなか扱えない楽器（ハンドベルなど）も含め、多くの楽器を紹介し、それぞれの音の響きや重なり合う良さ、音を出す楽しさを知れたことは、子供たちにとって、ますます音楽を楽しむことにつながっていった。今後も共同実践を続け、子供たちの感性を育てていきたいと願う。

(T 大学教育学部附属 T 小学校 1 年部主任 土橋 淳)

## (2) 児童のアンケート結果から振り返る 2022 年度協働実践の総合考察

2021 年度では、合奏劇の協働実践をどのように感じていたのか児童の感想文記述から読み取り考察を行ったが、2022 年度は観劇後と協働実践後に 2 種のアンケート調査 1, 2 を実施したことで、児童の記述を丁寧に分析することができた。アンケート調査 1 では、「来週やってみたい楽器は何ですか」の調査結果とその楽器を選んだ理由から、学生による範奏の表現力や演奏技術が児童の興味関心を引き出すことに直結していることが分かった。上演する学生が合奏劇の登場人物である楽器に「いかに切り切れるか」が重要である。アンケート調査 2 の協働実践で担当した楽器を鳴らす時「どんな気持ちで鳴らしたか」では、担当する楽器の役どころを理解したうえで「きれいな音で」「よく響くように」といった「こんな音を出したい」という思いを持っていたことから、劇のストーリーの中でキャラクター性を持った楽器の位置づけが児童の演奏時の思いを引き出すことに繋がっていると考えられる。また、みんなを楽しませてあげたいと考えた児童もあり、協働実践を通して関わる学生や友達へ自分の音色を届けようとする心情を育んだことが伺えたことから、「合奏劇」の教材性を改めて確認するに至った。しかし一方で、限られた時間での実践で「楽器自体になり切る」ことの難しさも浮き彫りになり、学生も児童も達成感を持てる協働実践の方法と充実した活動にするための改善点を探っていく必要性を感じた。

カスタネットに対するアンケートでは、仲間外れにされることへの悲しみや仲間外れにする台詞に嫌悪を抱くなどカスタネットの立場に立って考えた児童が 95% であったこと、カスタネットに対し特性や魅力に気付かせる役どころのハンドベルが「やってみたい楽器 No. 1」であったこと、最後に楽器全員が仲良く演奏しながら歌った《おもちゃのチャチャチャ》が一番楽しい場面だと感じた記述があったことなどから、「合奏劇」が「自分の良さに気付く」「他の人の良さや思いに気付く」「相手に嫌な思いをさせたらあやまる」「多様性と共生」などの道徳性を育むことに繋がることが明らかとなった。児童の感想文から抽出した下記の①～⑩の記述からは、「スペシャル音楽授業」がそれぞれの児童に残したものについて考えさせられ、「合奏劇」の協働実践の更なるなる実践方法や改善を継続していくことに加え、新たな「合奏劇」教材開発の意義を見いだすことができたと考えられる。

【表 10】 児童アンケート 2 の Q7 協働実践後の感想から：児童に残したのに関して

①トライアングルをチーンとひいたら、タンバリンさんが「わー」っていいました。たくさんの音が出てうれしかったです。ちょっと気取った顔で演奏しました。②劇をやりながら楽器を使うのが初めてだったので、劇に参加したらすごくわくわくしたからです。③劇に参加した時緊張していたけれど、すごくきれいな音が出て安心しました。またいろんな音を出したいです。④他の楽器も、とてもいい楽器でした。今日一日とっても楽しかったです。⑤いろんな音が出るタンバリンが、僕はすごいなぁ～と思いました。⑥タンバリンは家にはないから、お母さんに買ってもらって弾きたいです。⑦色々な楽器に会えてうれしいです。⑧2年生になってもまたみんなとやりたいです。⑨みんなで力を合わせていい劇をすることができてとてもうれしかったです。⑩他にも出ていない楽器も、今度はその中に入れてあげてみてください。

(望月たけ美)

### 7. 第2の「合奏劇」教材開発への基礎調査

今回実施した児童アンケート 2 の Q4 「劇の仲間に入ってほしい楽器や音は何ですか」の結果を基礎調査とする【図 3】。

【図 3】 「劇の仲間に入ってほしい楽器や音はなんですか」の回答（複数回答可）

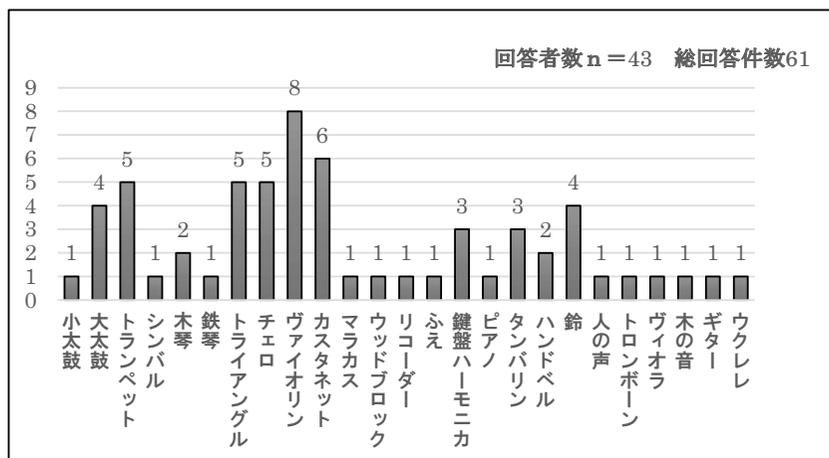


図 3 の結果で最も多かったのはヴァイオリン (8 名)、カスタネット (6 名)、トランペット・トライアングル・チェロ (5 名) が上位 3 位の楽器であった。合奏劇の仲間に入れて欲しい楽器の第 1 位にヴァイオリン、第 3 位にチェロが挙がったのは、T 大学教育学部附属 T 小学校が創立以来、特色教育として取り組むオーケストラ学習が背景にある。全国的にも珍しいこの取り組みでは、小学校入学と同時にヴァイオリンまたはチェロの学習を開始し、小学校 3 年生からは管楽器や打楽器の学習も加わり、6 年間のオーケストラ学習を通して仲間と協働して音楽を作り上げる体験や過程を大切にしている<sup>10</sup>。松本ら他 (2014)<sup>11</sup> の研究報告では、同小学校児童の音楽学力調査

の結果からオーケストラ教育が児童の聴取力を育む音楽教育の在り方として有用であると述べている。これらの背景から、上位3以外の回答内容の中にトロンボーンやヴィオラが選ばれていると考えられる。打楽器に注目すると、「合奏劇」の登場人物となったトライアングル、カスタネット、タンバリン、ハンドベル、鈴の5種の楽器全てが選択されており、今回の協働実践によってこの5種の楽器への理解が深まり、愛着のようなものが生まれたものと推察する。回答種数25個のうち16個が打楽器であった中、人の声や木の音など身近にある音素材を取り上げた児童がいることは興味深い。

## 8. おわりに

6.5.(2)【表10】児童アンケート2のQ7協働実践後の感想から：児童に残したものに関してで示したように、「⑩他にも出ていない楽器も、今度はその中に入れてあげてみて下さい」という感想を書いた児童がいた。T小学校の特色教育を通してオーケストラで活躍する管弦打楽器を目の当たりにしている児童ならではの感想であり、もっと多くの音色や形状や奏法の異なる多様な楽器の仲間が存在していることを知るがゆえに「他にでていない楽器も」合奏劇の一員として「入れてあげてみて下さい」と記述していることが伺える。児童⑩の記述を含め、第2の「合奏劇」教材開発の基礎調査データとして検討していきたい。

第2の「合奏劇」開発にあたり、基礎調査を充分に行う必要がある。楽器の仲間として設定する楽器においては、教育楽器に留まらず、児童が幅広い楽器種との出会いを通して伝承遊びや地域の音楽を取り入れる他、我が国や世界の文化に興味を持てる教材を検討したい。加えて、道徳、国語、図工、国際などの教科と連携した教材開発を構想したいと考える。

(望月たけ美)

## 謝辞

本研究内で振り返りを行った2021年度協働実践で共同研究を行った常葉大学教育学部附属橘小学校の池上万裕香教諭、2022年度協働実践でご協力を頂いた常葉大学教育学部附属橘小学校の杉浦佳子教諭に感謝申し上げます。

## 付記

本研究は、2022年度常葉大学共同研究助成を受けたものである。共同研究チームは、研究代表者（望月：常葉大学教育学部准教授）、共同研究者（土橋、池上：常葉大学教育学部附属橘小学校教諭）の3名である。本論文の執筆は、2022年度「合奏劇」協働実践に関わった望月と土橋による。

## 参考文献・引用文献

1. 北浦恒人, 滝沢ほだか, 横田典子 (2016) 「幼児から児童を対象とした総合的な表現活動の試みと支援—手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇を中心として—」『地域協働研究』第2号 25-32 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学知己共

同推進センター

2. 津田奈保子, 東本康栄 (2020) 「幼稚園年長と小学校1年生の表現の比較から—絵本・オノマトペから音へのイメージ化を通して—」『人と環境』Vol.13:23-33  
大阪信愛学院短期大学
3. 下田和男・西村政一編著 第6章 125-129 のつくる活動「がんばれカスタくん」『幼児の音楽と表現』（望月台本作成アレンジ版）
4. 望月たけ美, 山本華子 (2020) 「合奏劇の実践—授業から保育現場へ—」小田原短期大学研究紀要第50号 79-88
5. 4. に同じ
6. 望月たけ美, 山本華子 (2021) 「教育楽器を用いた「合奏劇」の教材性に関する研究—幼小連携の視点から—」常葉大学教育学部研究紀要第41号 237-255
7. 望月たけ美, 土橋 淳, 池上万裕香 (2023) 「「合奏劇」を活用した2つの協働実践の試み—幼稚園教諭と学生の実践, 学生と小学校1年生児童の実践—」常葉大学教育学部研究紀要第43号 173-191
8. 文部科学省 小学校学習指導要領音楽科編 第3章
9. 文部科学省 小学校学習指導要領音楽科編 低学年の児童における器楽の活動（指導計画の作成と内容の取扱い）
10. 常葉大学教育学部附属橘小学校 home page <https://www.tokoha.ac.jp/fuzoku/>  
閲覧日 2023年10月18日
11. 松本進之介, 松本進, 三村真弓 (2014) 常葉大学教育学部附属橘小学校におけるオーケストラ学習が育む音楽能力：聴取力に着目した音楽科学力調査の結果から音楽学習学会紀要 / 『音楽学習研究』編集委員会編 10 29 - 38

